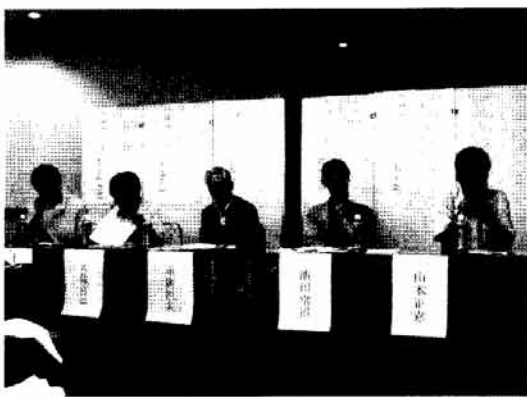


大蔵氏は、出発から登頂まで32日間の速攻だったが事前の順応活動も十分にこなったことや、I氏に直前まで異常がなかった経緯、自分がクライアントよりも先行した理由などについて説明した。

池田常道氏は、公募隊の主催者側は高所登山がガイド登山の概念からはずれたものであることを説明する必要があると指摘し、磯野剛太氏はガイドの立場からコメントした。谷口ケイ氏は、クライアントは自分に合った公募隊を責任を持って選ぶことと、リスクの認識の必要性を強調した。

山本正嘉氏は運動生理学の立場から検討を加えた。酸素をうまく使えばエヴェレストでも6000



パネラーとして話をされた、右から、山本、池田、重廣、大蔵、上小牧の各氏

対台の登山と同じになること、1日あたりの運動量は意外に少ないことと、下山が手薄なのでBCへ戻ってくるまでの対策を講じる必要があることを指摘した。

ここで、増山茂氏が突然死についての知識を整理し、以後、医師による専門的な演題が3題続いた。上小牧憲寛氏は、60歳以上の人が高所登山をする場合には本人と周囲に相應の覚悟が必要であることとを明確に述べた。越智勝治氏は「南極における特異な不整脈の経験」、堀井昌子氏は「出発前にできることは何か」という点について、興味深い発表をした。

重廣恒夫氏は、8000m級の峰のオーソドックスな戦術について、従来の負荷をかけながら順応していくタクティクスと、隊員資格について言及した。加藤慶信氏はガイドとしてクライアントの体調を細かくチェックし、ロープを常に結んで安全を確保して登った経験について発言した。

最後に高山守正氏のコメントとして、I氏の死因は不整脈死の可能性が高いが、事前の診断は難しい。高齢者のヒマラヤ登山には覚悟が必要」と、発表された。

本シンポジウムのテーマは、商業公募隊の特性という社会的なテーマと、高所での突然死という医学的なテーマの2点だった。両テーマとも内容的に重要な問題が多い上に、講演者が多い印象もあり、結論は出なかった。商業登山の隆盛の中で避けて通れない課題であり、問題提起をしたという意義は大きい。今後、十分な時間をかけて討議されることを期待したい。

(野口いづみ)

### 山研運営委員会内 ミニ水力発電小委員会

### ミニ水力発電近況報告

昨シーズンは、7月下旬に上高



講師と熱心に意見交換する参加者(7月14日 山研にて)

地を襲った大雨の被害により、水源が使えなくなると、11月の閉所まで運転停止を余儀なくされた。しかし、今年は4月の開所に合わせて、共同研究先の神奈川工科大学の学生らの協力により復旧作業が行なわれ、運転再開に漕ぎつけた。以下、近況を報告する。

### 技術的改善(負荷制御装置の設置)

山小屋での実用化を推進するため、バッテリーを過充電および過放電から保護しつつ、負荷(電気機器)をできるかぎり自由に使えるよう、マイコンを用いた制御装置を昨年度設置した。この制御装置は、ミニ水力の発電量と、3段階の優先順位をつけた負荷の消費電力量を常時読みとり、あらかじめ組まれたプログラムに沿って、バッテリーを保護しつつ、必要に応じて段階的に使用できる負荷を制限するものである。今年度から本格的に導入試験を行なっており、順調に稼働している。これにより、従来、計器類を見ながら負荷の使い方に気配りしていた管理人の負担がまったくなくなり、大雨時などの特殊な場合を除いて、メンテナンスフリーとなった。この制御装置は、奥多摩三條の湯や旧鹿沢

温泉でも導入、実用に供している。見学者への対応

7月14日に、全国小水力発電推進協議会・長野県小水力発電推進協議会共催の見学会が実施された。当日は、台風の余波であいにくの天候となったが、県内外から大学、自治体、メーカー、農業関係者など多方面から37名が参加する盛況ぶり、小水力発電への関心の高さが窺えた(関連記事は『山と溪谷』10月号に掲載)。また、昨年、環境省職員の現地実務研修プログラムに山研のミニ水力発電が組み入れられ、今年も7月10日に15名が見学に訪れている。さらに、8月10日には、松本市小中学校の校長会53名が、「総合学習」の参考とするため見学に訪れている。

これら見学へは、山研管理人に对应してもらっている。ただし、事前に専門的な説明が希望される場合には、ミニ水力発電委員会の委員が現地に向いて対応している。JR車内誌への掲載

山研前管理人の木村太郎氏が代表を務めているNPG (National Park Guide) の紹介により、JR東日本の車内誌「トランヴェール」の取材を受けた。同誌8月号では

上高地特集を掲載しており、山研についてもインフォメーション付きで水車の写真と装置が紹介されている。

ミニ水力発電が注目を集めている背景には、環境とエネルギーが世界規模での課題となっているなかで、わが国でも今年度から小水力発電が新エネルギーに位置付けられたため、新たな設置には国からの補助金が交付されるようになったことがあげられる。山小屋だけでなく、今後いろいろなどころでの実用化が期待できるだけに、山研のミニ水力はそのモデルとして注目を集めている。(柴山信夫)

### 三水会

#### 韓国山行10周年を終えて

1998(平成10)年に始まった三水会韓国山行は、今年度10回目を迎えました。

この山行に延べ170人あまりの方が参加し、訪れた山々はほとんど韓国全土に及び、27座の登山を行ないました。美しく守られた自然、可憐な花々、各地方の史跡・歴史、伝統に培われた美味食材、手工芸、厚い人情に出会えた10回

の山旅でした。山の案内人は、山の鉄人・ソウル明智山岳会会長の金榮大氏、日本山岳会の乾能尚さんととはまるで親子のように親密なパートナー・実業家の高基昌氏、明智山のメンバーの方々です。上高地山研にも来所いただき親交を深めてきました。

第1回の雪岳山では、咲き誇るオオヤマレンゲと出会い大感激。帰路は雨の中を延々10時間余り歩き、びしょ濡れで寒さに震えました。金さん、高さんと「10回目にもう1度登りましょう」と約束した思い出深い山です。そして、10年目に訪れて驚いたのは、あの緑深く美しいスリンドン溪谷に映えた赤い大きな鉄橋が、度重なる水害で流され、その残骸を目の当たりにし、人間の造作では自然の力に争えないものと再確認しました。

第1回の山行のおり、北漢山の山小屋のマダムが、石田稔郎さんへの感謝の気持ちで用意してくださいました。昼食の料理が忘れられません。10回の山旅の中でも最高の美味でしたが、いろいろないきさつを伺って、国を越えた友情に感謝。深く心に残る出来事の一つです。今回の雪岳山、北漢山ともに全

行程が天候に恵まれ、天からも祝福を受けているような豊かな気持ちになりました。10年間大きな事故もケガもなかったことに改めて感謝しつつ、現在は亡くなってしまった岳友に思いを馳せながら、打ち上げパーティで幕を閉じました。

乾・石田両先輩の山への崇敬の心がこの10回の山行につながり、参加させてもらえたことを心より感謝申しあげます。

三水会の韓国山行は、一応今回で終了となりますが、このご縁を大切にしながらまた韓国の人々に登りたいと思っております。たくさん素晴らしい出会いをありがとうございます。 (福原サチ子)



10回を数えた韓国山行、雪岳山山頂にて